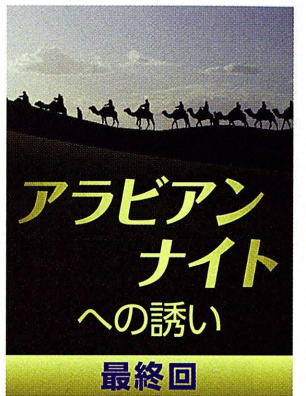


# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## シンドバッドの海へ：インド洋のイスラム商人 (アラビアンナイトへの誘い, 最終回)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5574">http://hdl.handle.net/10502/5574</a>



# 夢と不思議が錯綜するアラビアンナイトの世界を旅してみよう。最終回は「シンドバッドの海へーインド洋のイスラム商人。ごぞんじ船乗りシンドバッドは七度におよぶ航海で莫大な富を手にした。

## シンドバッドの海へーインド洋のイスラム商人

文・写真  
西尾 哲夫

text & photo by  
Nishio Tetsuo

京都大学大学院文学研究科博士課程修了。文学博士。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手、同助教授を経て現職。現在、人間文化研究機構・国立民族学博物館副館長／教授、総合研究大学院大学教授

……オマーンの話…アラビアンナイトの船乗りシンドバッドが出港したのはオマーンの港・ソハールと言われています。

この一文は、外務省が若者世代向けに発信している「外務省やわらかツイート」に投稿された（11月14日）ものです。同日にオマーン的首都マスカットで開かれたワールドカップ（W杯）アジア最終予選に向けてのツイートだったのでしよう。試合は2対1で日本が競り勝ったものの、ハラハラしながら観戦したファンも多かったのではないでしようか。

オマーンはアラビア半島の東南端に位置しており、アラビア海に面しています。海上交通のかなめにあり、乳香をはじめとするオマーンの名産品のほか、東西の物産がオマーンをいきかいました。



オマーンのソハール港。オマーンではシンドバッドがここから船出したと信じられている。

実はオマーンにはシンドバッドが出港したとされる町が二つあります。もうひとつの町スールは、ソハールから四百キロメートルほど東南に下がった海岸線にあり、やはり古くからの港町でした。

ところがアラビアンナイトの《シンドバッド航海記》には、ソハールの名もスールの名も出てきません。実はオマーンと《シンドバッド航海記》が結びつけられたのは、一九八〇年にダウ船で中国まで航海したイギリス人セヴェリンの冒険がきっかけになったようです。セ

ヴェリンはスールから『ソハール号』に乗って船出し、半年以上の航海の後に中国の広東に到着しました。セヴェリンの航海については『シンドバッドの海へ』（筑摩書房）という題名で日本語

にも訳されています。セヴェリンの航海は、シンドバッド第八の航海ということになるのかもしれない。

一七〇四年、ガラン版アラビアンナイトの第三巻として初めてヨーロッパ世界に紹介された《シンドバッド航海記》の冒頭部分には、次のように書いてあります。

……ここでわたしははっと気づき、残った遺産をかきあつめると、家財道具いっさいをせりにかけて売りはりました。それから海をわたって商いをする人たちと近づきになり、ためになる話を聞かせてくれる人々と親しくなりました。そして残っていた金を元手にすることに決めました。いったん心をかためると、いささかのためらいもなしにバスラへと向かい、



巨大なルーフ鳥にぶらさがったシンドバッド。エドモンド・デュラック画（1914年）

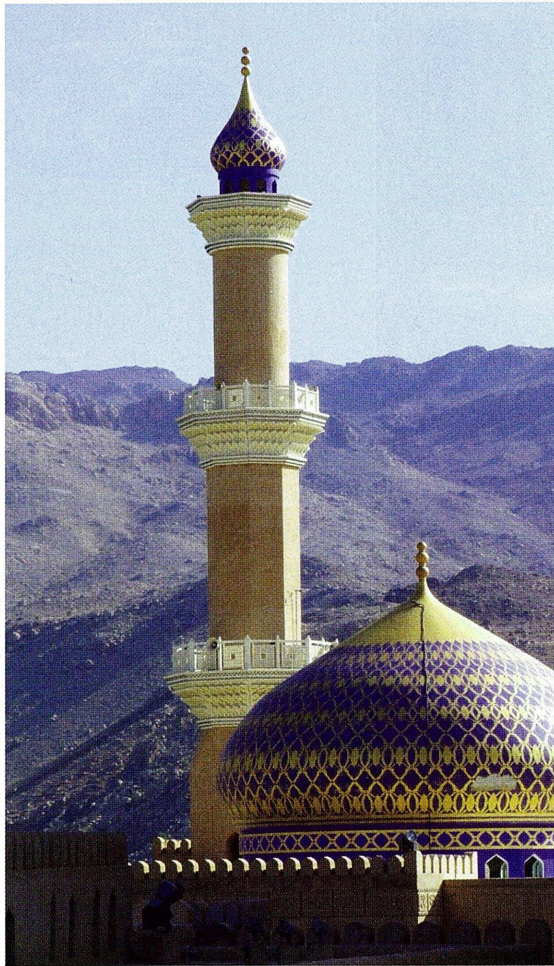
かの地にいたるや商人たちと金を出しあつて用意した船に乗りこんだのでした。

このようにシンドバッドが船出したのは、バグダッドの都と川でつながっているバスラの町でした。バスラからは水路を通じて海に出ることができます。

シンドバッドは七度におよぶ航海をするうちにだんだんと金持ちになっていきました。最初は財産をはたいて仕入れたささやかな積み荷をもって小

な船に乗りこんだのですが、第五の航海では自分の船を使っています。この航海では「海の老人」と呼ばれる妖怪のような生き物と遭遇して苦勞するのですが、「海の老人」はオランウータンがモデルではないかという説もあります。これより先、第四の航海ではココヤシが採れる島に漂着し、インドの殉死（サティ）を思わせる習慣のせいで大変な経験をするようになります。

さらに第六の航海ではセイロン島に漂着し、国王からバグダッドのカリフにあてた親書を託されます。セイロンはシンドバッドの時代から宝石の大産地として知られていました。



古都ニズワ/オマーン

の谷の向こうには島の中ほどにある山がそびえています。この山が世界で一番高い山であることはまちがいありません。航海中には三日にわたってその山を見ることができるところです。山にはルビーやさまざまな鉱石があり、鉱石のほとんどが宝石を磨くさいに使う金剛砂となります。また、ヒマラヤ杉だとかココ椰子をはじめとして、あらゆる種類の木やめざらしい植物を見ることが出来ます。川や河口では大粒の真珠が採れますし、ダイヤモンドを豊富に産する谷もあります。わたしは、エデンの園を追われたアダムがやってきたというその山まで巡礼し、めざらしいもの見たさの一心でいただきまで登ってみました。

シンドバッドの言う「世界で一番高い山」とは、世界遺産にもなっているアダムスピークのことです。標高は二千

メートルあまりですからそれほど高山というわけではありませんが、この山には聖なる足跡があるとされており、諸宗教の聖山として崇拜されてきました。このアダムスピーク以外にも《シンドバッド航海記》には、当時の地理情報がつまこまれています。

……わたしたちは帆をあげると、ペルシア湾を抜けて東インドへと向かいました。ペルシア湾の右方は幸福のアラビアに接しており、左方にはペルシアの地があります。世の人の言にしたがえば、湾の幅は最大で七十リユーとか。ペルシア湾を出ますと、東の海、すなわちインドの海がどこまでも広がっており、アビシニアの岸辺から四千五百リユーの彼方、ワクワークの島までつづいているのです。

ここに出てくるワクワークの島に、ガラランは次のような注釈をつけています。「ワクワークの島は」アラブ人によれば中国の向こうにあり、同名の果実をつける木が生えているという。これはまちがいでなく日本をさしている……」

ワクワークという語の響きは「倭国」と似ているのですが、中世のアラビア語資料には日本を特定する一文はみあたらず、逆に日本を指しているとは思えない記述も出てきます。ちなみにワクワークの島に生える木は、人間の頭と同じ形をした枝をつけることとされています。『西遊記』の人参果と同じです。中世のイスラム商人は砂漠を抜ける

シルクロードだけではなく、インド洋や東南アジアの島々を結ぶ海のシルクロードでも活躍し、インドネシアやブルネイなどにイスラムが伝わりました。《シンドバッド航海記》には、海のシルクロードに賭けた商人たちの夢が詰まっています。



今は庶民の足・ダウ船/現代のドバイ

P59~67

シルクロード・中近東への旅行はP59~67をご覧ください。

西尾哲夫著「世界史の中のアラビアンナイト」(NHK出版)書店にて絶賛発売中!

